

人生上昇塾



THE LAST TRAVEL

最後の旅



人生上昇塾 塾生代表

安達 正純

筆者より“あなた”へ

“ご縁”をありがとうございます。人生上昇塾の安達です。
本日は、人生の創造主になる方法・シリーズ第3弾「最後の旅」のダウンロードをありがとうございます。

おかげさまで、第1、第2弾を合わせますと
現在時点（2010年10月）で1万5000名以上の方にお読みいただきました。
また多くの読者のみなさんから感謝や感想のメールを頂戴いたしましたことを
この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。
感謝！<(_ _)>

人生上昇塾を開設して、まもなく“4年”になります。
おかげさまで、簡単に“思い込み”を手放すことができる「**観念浄化ワーク**」は
全国の多くの方々にライフワークとして使っていただいています。
実践されたみなさんは、とても大きな人生の変化を実感されておられます。
この浄化ワークのやり方は、人生の創造主になる方法・第一弾で公開しています。

またとても嬉しいことに、“**本当の自分へ還る旅**”をガイドする
「ツアーガイド」も、私を含めて“6名”になりました。
東京・静岡・大阪で、定期的に**勉強会（ベーシックコース）**を開催していますので、
ぜひ遊びにきてください。
7年前に、たった一人ではじめた旅でしたので、感無量です。みんなありがと～

さて、このシリーズ第3弾は、
読者の方やセミナー、講座などでいただいた質問や相談の
回答をわかりやすくまとめたものです。

人生上昇塾に「**斉藤信也**」という架空の男性が訪ねてくる
という設定で、進行していきます。

そうそう、あるある！
そんな感じで気楽にお読みいただければと思います。

ご縁のある方に、この教材が届きますように・・・
それでは、**どうぞ良い旅を。**



人生上昇塾 安達様

突然のメールで失礼します。

僕は、大阪に住んでいる38歳の男性です。

今年で、会社を経営して10年目になるのですが

この大不況で、今まさにどん底です。

給料もろくに持って帰れず、もうどうしていいのかわからない状態です。



これまで成功法則や願望実現などのセミナーに参加したり

心理カウンセリングを受けてみたりと、いろいろやってきたのですが、

人生も、僕もさっぱり変わりませんでした。

そんなときにネットで人生上昇塾の無料教材を読みました。

安達さんも、私と同じような境遇だったことを知って、親近感が湧きました。

ぜひインターネット講座を受講して、新しい自分に生まれ変わりたい！

と思っているのですが、またどうせ何も変わらないだろうと

疑っているのも、正直な気持ちです。

いろいろとお聞きしたいことがあります。

ぜひ一度お会いして話を聞かせていただきたいと思います。

ご返信お待ちしております。

どうぞよろしく申し上げます。

大阪市 斉藤信也

そして後日・・・

はじめまして、斉藤です。今日は、どうもすみません。

どうも安達です。どうぞお座りください。

あなたは“人生の創造主”

安「今日はいろいろと聞きたいことがあるとか・・・」

斉「はい、そうなんです・・・
いろいろあり過ぎて、何かからお聞きしていいやらで」

安「まあ、気楽になんでも聞いてください。
わからないことは、わからないって言いますので（笑）
本当にUFOは存在しますか？みたいな質問は勘弁してくださいね」

斉「ハハハッ・・・そんな悠長なことを言ってる余裕はありませんよ～
とにかくいろいろと切羽詰まっています」

安「いろいろと言いますと？」

斉「まず仕事ですね。この不況で3年連続の赤字決算でして
もう追加の借入もできないし、ろくに給料も持って帰れず・・・
妻もパートに出ているので、なんとかこうやって生きていますが
お先真っ暗でどうしていいやら・・・
いつ妻から“離婚”の二文字が出てくるか、恐ろしくて」

安「そうですか・・・それは大変ですね」

斉「安達さんも、僕と同じ境遇だったとか」

安「そうですね。ウン千万の借金があるのに、売上が月5万円なんて
時もざらにありましたよ。おまけにパニック障害になってしまったので
まともに営業もできず、まさに倒産、自己破産寸前でした」

斉「そこからの話は、無料教材で読みました。
まさに“**生まれ変わった**”わけですね。
僕も、あなたのように生まれ変わりたいんです」

安「それは、なぜですか？」

斉「へっ？・・・なぜって、今があまりにも悲惨だからですよ。
生まれ変わって、“**幸せな人生**”を掴みたいんです」

安「う～ん・・・それは無理な話ですね」

斉「はあ？無理ってどういうことですか？」

安「斉藤さんは、“**幸せな人生**”を目指して、いろいろやってこられたんですよね」

斉「そうです。成功法則、自己啓発、願望実現、心理カウンセリング・・・
本当にいろいろやってきました。もう500万円はゆうに投資しました。
そもそも自営業をはじめたのも、もっと幸せになりたかったからです」

安「で、“**幸せな人生**”は手に入りましたか？」

斉「いいえ、だから今ここに來ているんです」

安「なぜ手に入らなかったのでしょうか？」

斉「はあ・・・なぜと言われても」

安「そこがとても大切なところなんです。
そもそも、**悪い人生を“良い人生”にすることはできないんですよ**」

斉「・・・おっしゃっていることがよくわかりませんが」

安「ですよ。

私も8年前までは、さっぱりわかりませんでした。

まったく斉藤さんと同じだったんですね。

とにかく人生を良くしたい、幸せになりたいと

自分なりにがんばって生きてきたつもりです。

私も40万円も出して、願望実現セミナーにも参加しました。

でも、何をやってもさっぱりうまくいかなかったんです」

斉「本当に、僕とよく似ていますね。

でも、なぜこんなにうまくいかないんでしょうね。

ずっと、どうせ僕がダメだからなんだって思っていましたけど」

安「そうそう！そう思っちゃいますよね。

私も、自分がダメだからだって、ずっと自己嫌悪がありました。

でもそれも悔しいから、どうせセミナーなんてみんな金儲けを

目的にやっている詐欺集団だろうなんてね（笑）」

斉「ハハハッ、そうそう！」

安「うちもそうだと思って、確かめに来たんでしょう？」

斉「・・・すみません、凶星です」

安「全然OKですよ（笑）まずは疑ってください。

というか、私の言うことは、信じてはダメですよ。

“信じる”の裏側には、“疑念”があるんですね。

ですから、最初は、信念で前に進むことができますが

いずれ必ず“疑念”が表面に出てくるときがやってきます」

斉「なるほど・・・そこで挫折しちゃうんですね」

安「そういうことですね。

“**疑念**”は、自分にとって都合の良い言い訳になります。

で、また新しいセミナーを探しだすわけです」

斉「アイタタタッ・・・」

安「だから、まず“疑念”から入っていくことです。

うん？なんだか怪しいぞ、よし俺が嘘を暴いてやろう！って感じです。

本物が、偽物が・・・それを確かめるには実際にやってみるしかないでしょ」

斉「確かにそうですね」

安「正直、私自身がそうだったんです。

この旅を始めた頃は、自分の中にある“**疑念**”との戦いでした。

よし、これだ！という確信があったんですけどね～

どうしても疑う気持ちがなくなる・・・

で、自分と約束したんですね。

1年やってみよう！もし1年やってどうにもならなかったら

その時は、あっさりやめてしまおうと」

斉「なるほど・・・で、どうにかなったわけですね」

安「まあ、そういうことですね～

面白いですよ。実際に自分の変化を実感していくと

疑念も消えていきましたけど、確信もなくなっちゃった。

“ひとつ”になっちゃったんですね。

“**はじめて乗る自転車**”に似ていますよね。

二つしか車輪がないのによくこけないよな～ でも、実際にみんな乗っているし・・・

なんて、どれだけ考えても乗れるようにはならないですよ。

結局、自分でやってみるしかないわけです。

こけても、こけても、またやってみる。来る日も、来る日も・・・

やったー！！ついにその日が来るわけです。

すると、疑念も、確信も、何にもないですよ。もう自分と自転車はひとつになる」

斉「信じているうちは、まだひとつになっていないってことですね」

安「そういうことです。まだ“自分の外側にある”ってことですね。

だから、いつまでも“外の世界”を探し続けるわけです」

斉「なるほど・・・

そうそう、さっき“悪い人生を、良い人生にすることはできない”

って、言っていましたよね。

僕にとって、すごく衝撃的な言葉だったんですよ。

だって、もしそれが本当なら一体、何のためにがんばっているのか

さっぱりわからなくなってしまうから」

安「はじまりが“悪い”だと、ずっと“悪い”んです」

斉「・・・」

安「この世界には、“今”しかありませんよね。

1秒前も、1秒後もどこにもないわけです。

1秒前の呼吸をもう一度しようと思ってもできませんよね。

“今”しかない。

その今を“悪い”と決めてしまうと、永遠に“悪い人生”になってしまいます。

もちろん、たまに“良い人生”がやってきますよ。

でも、また悪い人生に戻っていくんです。

なぜなら、良いも悪いも、“同じコインの表と裏”だからです」

斉「うーん、確かに幸福と不幸が交互にやってきたような気がしますね。

でも、そのコインは、ずっと回り続けるのでしょうか。

どこかで、ピタッと“幸福”で止まることはないのですか？」

安「ですよね～ そうだったらいいんですけどね。

残念ながら、この世界は“無常”が大原則です。

変化しないものは、どこ探してもありません。

“宇宙そのもの”が変化することで存在しているんですね。

生きている限り、ずっとコインは回り続けます。

だから、願望実現も成功法則も決してなくならないんですよ」

斉「がーん、だから世の中には、法則やメソッドが溢れ返っているか。

まったく切りがないことをやっていたわけですか・・・

まさか“良くなるう”とすることが、“悪い人生”を創っていたなんて」

安「**誰もが“人生の創造主”なんです」**

斉「人生の創造主・・・確か、無料教材のタイトルでしたよね」

安「そうです。みんなその“自覚”がないだけなんですね。

みなさんは、人生を思い通りにしたいって思っていますけど

実は、すでに“思い通り”になっているんですよ」

斉「でも、ちょっと待ってください。

この人生がすでに自分の思い通りになっている・・・としてですよ。

でも、僕的には全然気にいらないわけです。

こんな“苦しい人生”は、もうまっぴらご免ですよ」

“苦しみ”の根本的原因とは

安「その“**苦しみ**”の**根本的原因**は何だかわかりますか？」

斉「根本的な原因ですか・・・お金がないことかな」

安「確かにお金も必要ですよ。

では、お金で何を得ることができるでしょうか？」

斉「・・・安心、安定でしょ。それに自由に信頼、優越感に愛とか
なんでも手に入りますよね。まさに万能薬ですよ」

安「そうですね。私もずっとそう思っていました。
お金さえ十分にあれば、“幸せ”が手に入るって・・・
でも、もしそうならお金持ちは、みんな苦しみから解放されているはずですよ。

でも、実際はそうではない。お金を失う不安とか、時間的束縛や
人間関係の不和とか、死に対する恐怖など、いろいろな苦しみがちんとあるわけです。

私も何もかも失い沖縄に行って、事業が軌道に乗りました。
お金がどんどん入ってくる。借金もどんどん返済できる。
でも、なぜか“不安”は消えることはありませんでした」

斉「・・・何が不安だったのですか？」

安「**また同じことを繰り返すのではないか・・・という思いです。**
実際に、それまで上がったたり、下がったりの人生でした。
“山が高いほど、谷も深い”という言葉がありますが
まさにそんな感じだったんですね。
だから、また山を登っていくことが怖かったわけです」

斉「なるほど、私も同じような思いがありますね。
でも、それでは、お金と幸せは関係ないってことになりますよね」

安「その通りです。**そもそも、お金と幸せは、関係ありません。**
お金は、“お金”。幸せは、“幸せ”。
本質的には、まったく別のものなんです。
仕事も、お金も、財産も、パートナーも、家族もです」

斉「何もかも？」

安「そう何もかもですね。“幸福感”って言うでしょ。
幸せって、“感覚”なんですね」

斉「感覚ですか？」

安「そうです。そもそも“幸福”という感覚は、自分の中にあるんですね。
もともとあるものが、外の世界との縁で、表に出てくるだけです。
でも、斉藤さんのように、“幸せとはこういうものだ”という条件付けをすると・・・」

斉「そっか！
その条件が揃ったときだけ“幸福感”を味わえるってことですね」

安「そう、逆に条件が揃っていないと“不幸”を感じるってことです」

斉「ああ、すべて自分が創っていたのか・・・まさに、人生の創造主だ」

安「ですね。人生はすべて“自作自演”なんです」

斉「・・・ということは、自分次第でどうにでもなるわけか」

安「そうそう、すべて“あなた次第”です。
まず“そこ”に気づくことが大切なんですね」

斉「気づけて良かったですよ。
それで、さっきの“苦しみの根本的原因”というのは何でしょう？」

安「“自分が誰なのか”を知らないということです」

斉「そうかな～ 知っているような気がしますけど・・・
斉藤信也という名前で、38歳男性で、生まれは大阪市で
経歴は云々ということですよ」

安「それは“情報”ですよ。
もし斉藤さんが、記憶喪失になったら、自己紹介できますか？」

斉「・・・もちろんできないでしょうね」

安「ですよね。でも**あなたという“存在”**は消えてはいません。
ちゃんと私の目の前に座っています。
それは誰ですかとお聞きしているんですね」

斉「・・・そんなこと考えてもみませんでしたよ。
あ、そっか“人間”ですよね」

安「それは“概念”ですね。
情報も概念も、自分にくっつけた“ラベル”にすぎません。
あなたは、“ラベル”でしょうか？」

斉「そうではないことは確かですけど・・・肉体？
あっ、これもラベルか・・・うーん、わかりません」

安「実に不思議なんですよ。
私は“自動車”に乗ることがありますけど
“自動車”というものが、大体どんな構造をしていて
何をために存在するのかを知っています。

でも、この“自分”というものは、さっぱりわからない。
何も知らずに生きて、何も知らないままに死んでいきます」

斉「はあ・・・まあそうですね」

安「私も40数年、ずっとこの肉体が自分だと思って生きてきました。
それが苦しみの根本的な原因だったんですね」

“本当の自分”とは

斉「ちょっと待ってください！

この肉体が自分ではないということですか？」

安「はい、そうです」

斉「はいそうですって、じゃあ“本当の自分”って一体誰なんですか？」

安「これです」

斉「これって、机ですよ」

安「これも」

斉「これは、灰皿でしょ」

安「そして、これ」

斉「はあ？僕ですか？」

安「はい、そうです」

斉「安達さん！何も知らないと思って、馬鹿にしているんですか」

安「とんでもない。斉藤さんが“誰だ？”って聞くからですよ。

一言でいうと、**あなたが見ているものは、すべてあなた自身です**」

斉「はああ・・・まったくわかりません」

安「それで正解ですよ」

斉「わからないことが正解なんですか？」

安「そうです。実はこういうことなんです。

私たちの脳は、“認識する”ことが仕事です。

これは“私”だ。あれは“机”だ。それは“斉藤さん”だと

ラベルをペタペタ貼って、認識しているわけです。

認識できないもの、情報がないものは、存在していない、

わからないと判別してしまうんですね」

斉「なるほど、**僕たちは“認識の世界”に住んでいるのか**」

安「はい、そういうことです。

とにかく人間は、探求熱心ですからね～なんでも認識しようとするわけです。

だから辞書や百科事典って、とんでもなく分厚いでしょ」

斉「ですね。うんざりするほどに・・・」

安「これからも、データーはどんどん増えていきますよ。

いずれ紙の本では、持ち運びできない時代が来るでしょうね」

斉「iPad 持ってて良かった（笑）」

安「それは良かった（笑）」

でも、注目すべきは、認識の世界のことではありません」

斉「もしかして、“別の世界”があるんですか？」

安「だって、よく考えてみてください。

おぎゃあ～と生まれてきた時に、私たちは、この世界を認識していたでしょうか？」

斉「いいえ、何も知らないはずですよ」

安「ですよ。親や先生など周りの人にいろいろな情報をインプット

されて、少しずつ“認識の世界”が出来上がっていくわけです」

斉「もしかして別の世界って、認識する前の世界のことですか？」

安「おっ、するどいですね。そう、それが**“本質の世界”**です」

斉「・・・本質の世界」

安「**“あるがままの世界”**のことです。

何も足さず、何も引かない、そのまんまの世界ですね」

斉「あるがまま、そのまんま・・・ですか。うーん、想像できないなあ～」

安「人間は、いつもそう考えます（笑）」

斉「あっ、そっか！認識する以前の世界でしたね（笑）」

どう考えてもわからないってことか」

安「そうそう。

概念や言葉がない世界ですから、思考では理解できません。

理解しようとする“私”すらいない世界ですからね」

斉「・・・“私”がない世界」

安「**“私”**というのは、**脳が認識している自分**ですから」

斉「“私”は、脳の認識なんですか？」

安「さっき言ったように**“記憶喪失”**になったら

“私”は、一瞬でこの世から消えてしまいます。

“私”は、過去のデータの集合体なんですよ」

斉「僕は、データの集合体・・・そんな・・・」

安「斉藤さんは、自分のことをどんな性格だと思っていますか？」

斉「僕ですか？そうですね～

飽きっぽい性格で、ちょっと短気ですね。それと・・・

正義感は強くて、人情に弱いかな・・・

自分で言うちょっと恥ずかしいですね（笑）」

安「それも過去のデータです」

斉「はぁ・・・性格も**“脳”**の認識”だってことですか」

安「そうです。私は、“思い込み”で創られているわけです」

斉「・・・じゃあ、この僕は存在していないと」

安「そう、**私には“実体”というものがありません**」

斉「そんな馬鹿な・・・だって事実、僕はこうしてここにいる」

安「と、脳が認識しているわけです」

斉「・・・」

安「さすがにピンときませんよね。

では“家”には、実体があるのでしょうか？」

斉「家ですか。もちろんありますよね。

実体があるから、住むことができるんですから」

安「では、屋根は家でしょうか？」

斉「屋根は、家の一部ですよ」

安「では、壁は？」

斉「壁も、家の一部ですよ」

安「窓はどうですか？」

斉「家の一部です」

安「さて玄関は？」

斉「・・・何が言いたいのですか？」

安「一体どこに“家”があるのかってことです」

斉「・・・どこって言われても」

安「ほら“実体”が見つからないでしょ。

家は、それぞれの部品の集合体なんです。

“私”も家と同じです。

過去のデータの集合体であって、実体というものがありません」

斉「だから、記憶がなくなったら消えてしまうのか・・・

なんだかちょっと怖くなってきましたよ」

安「**自我が怖がっている**ですよ」

斉「自我？」

安「脳が認識している自分のことを、人生上昇塾では

“自我”と呼んでいるんですね」

斉「僕は、自我で、実体がない・・・

そんなこと言われたら、余計に苦しくなってきますよ。

一体“本当の自分”はどこにいるんですか？」

安「家の話を思い出してください。

屋根、壁、窓、玄関・・・と部品をどんどん解体していくと

最後に一体何が残るのでしょうか？」

斉「・・・何にも残りませんよ」

安「いえいえ、そんなことはないはずですよ」

齊「・・・空間？」

安「はい、そうです」

齊「本当の自分は、空間なんですか？」

安「**純粹意識**ですね」

齊「純粹意識？」

安「禅では、“すべての人間には、仏性が宿っている”とっています。

この仏性とは、“純粹意識”のことなんですね。

それ以外にも、大いなる存在であるとか、創造主、神、無限、永遠、愛などいろいろな呼び名がありますが・・・」

齊「ちょ、ちょっと待ってください！

本当の自分は、創造主であり、神であり、無限なんですか？」

安「はい、そうです」

齊「そんなに、軽く言わないでくださいよ」

安「ダッハッハ・・・よく言われますよ。安達は、軽いし、普通だって。

でも、みんなちゃんとそのことを知っているんですよ。

ただ、外からの情報をインプットしすぎて、“自分が誰なのか”をすっかり忘れてしまっているだけです」

齊「もしかして、僕も知ってるのかな？」

安「もちろんです。だから今ここに来ているんです。

“自分探し”なんてするのは、人間だけなんですよ。

“探す”ということは、どこかに“本当の自分”がいるのを覚えているんです。

潜在的に失くしたことを知っているから、探すんですね」

齊「なるほど、なんとなく“自分探し”をやってきましたが
そういうことだったんですね。
でも、いろいろやってみたんですけど、結局見つかりませんでした」

安「それは当然です。
自我が、“本当の自分”を見つけるなんてできませんからね。
これが本当の自分だ！なんてことはありえないわけです」

齊「えっ、そうなんですか？」

安「**本当の自分と自我は、テレビと番組の関係によく似ています**」

齊「テレビと番組ですか」

安「そうです。自我を自分だと思い込んで生きている人は
自分は、テレビ番組の出演者だと思っているんですね。
“人生”というタイトルの番組の放映時間は、長くても80年程度。
だから、この決まった時間の中で、他の出演者と比べて、優劣を
競ったり、お金を稼いだりと、苦しくても必死になって
幸せになろうとがんばろうとします」

齊「はあ、それが“人生”だと思ってきたのですが」

安「それは“**自我の創作ドラマ**”ですね。
“本当の自分”というテレビの中で起こっていることなんです」

齊「じゃあ、“本当の自分”は、何をしているのですか？」

安「**ドラマを体験し、感じています**」

齊「体験し、感じている・・・それだけ？」

安「そうです。この宇宙には“**体験**”しかありません。
損だ、得だ！ 不幸だ、幸福だ！ 優だ、劣だ！
・・・なんていうのは、すべて自我のドラマなんです」

すべては、起こるべくして起こっている

斉「はあああ・・・まったく何やってたんだろう」

安「いえいえ、それでいいんですよ」

斉「えっ、でもすべて自我が創ったドラマだったんでしょ？」

安「それはその通りなんですけど

すべては、起こるべくして、起こっているんですね」

斉「すべて“必然”だってことですか？」

安「そういうことです。

偶然とか、必然とか言いますが、

それは自我が好き勝手に決めているだけの話です。

人間は、なんでも意味付けするのが好きですからね～」

斉「偶然などないと・・・」

安「そう、すでにカードは配られているんです」

斉「カード？」

安「ポーカーでも、ブラックジャックでも、七並べでも

カードゲームをプレイする時には、まず親がカードを切って

みんなに配りますよね」

斉「ということは、生まれてきた時にすでに決められたカード

を持っているってことですか？」

安「そういうことです」

斉「ちょっと待ってください。でもおかしくないですか、
もしカードが決められていたとしても、
僕には“自由意志”というものがあるはずです。
どのカードを切るかは、この僕が決めているはずですよ」

安「本当にそうでしょうか。
斉藤さんの仕事は、警察官ですか？」

斉「いいえ」

安「もしかして、泥棒とか？」

斉「そんなアホな、どちらも違いますよ」

安「それはなぜだと思いますか？」

斉「なぜって、どちらもやりたくないからですよ」

安「やりたくないのは、どちらのカードも持っていないからなんですよ」

斉「・・・」

安「今やっている仕事は何ですか？」

斉「小さなレストランを経営しています。今は散々ですけどね。
でも、そうなることが決まっていたってことですよ」

安「そう、すべて“縁”なんです。
警官は、警官の縁。泥棒は、泥棒の縁です。
縁のないことは起こりようがないんですね」

斉「そして、その“縁”は最初から決められていると・・・」

安「そういうことです。

私は、人生転落寸前で、沖縄に“縁”があって行くことになりました。

その時はイベント会社で、7年経って、神戸に帰ってきた時は

なぜかこんなことをやっています（笑）

沖縄で、実に様々な人との“縁”、不思議な出来事との“縁”が

あったんですね。だから、今人生がこうなっているわけです。

もし、これらがすべて偶然であったというのなら、

“人生はすべて偶然で出来ている”ということになりますよね」

斉「確かにそうですね。

でも、すべてが決まっているなんて言われると

だったら何もしないでいいんじゃないかって、無気力になりませんか？」

安「ほうほう、だったらぜひ“無気力”になってみてください」

斉「もしかして・・・」

安「そうです。そういう人ほど、そんなことはできないんですね。

“何もしない”なんて、1日もできないはずですよ（笑）

できることは、もうすでにやっているんです。

決まっているといっても、これは「自由意志」というプログラムです。

だからこのことを知っていたとしても、何にも変わることはありません。

ちょっとベランダに出ましようか・・・

これがなんだかわかりますか？」

斉「・・・ああ、これは大葉ですね」

安「はい、そうです。

近くのスーパーで、大葉の種を買ってきましてね。

本当にゴマより小さな種だったのですが、見事にこうなりました。

毎日収穫しても、元気に次々生えてくるんですよ。

納豆に入れたり、そうめんに入れたり、とても重宝しています。

でもよく見ると、それぞれ様子が違うでしょ」

齊「・・・これはすごく大きな葉が生え揃っていますね。
でも、こっちはちょっと小さくて葉もまばらです。
みんな同時に蒔いた種ですよ」

安「はい、同時に蒔きました。同じ水、同じ太陽の光、同じ風です。
でも、こんなに違うんです。なぜだと思いませんか？」

齊「・・・種が違うからですね」

安「種自体に、“プログラム”が書かれているわけです。」

齊「この種が“配られたカード”なのか・・・」

安「そう、だから、そもそも自分と他人を比べるなんて、まったくナンセンスなんです。
“うどんとそば、どっちが偉い？”みたいなおバカな話なんですね」

齊「あーそういうことか！
僕は、自分という“プログラム”を、只体験しているだけなんですね。
この人生は、“僕にしか体験できない”ことなんだ」

この世界には“あなた”しかいない

安「はい、その通りです。
そもそも、そのカードを配ったのも、そしてカードでプレイしているのも
斉藤さん、あなたなんですよ」

齊「・・・親も、子も、この僕ってことですか？」

安「そうです。そもそもこの宇宙には“あなた”しかいませんからね」

齊「そんなこと、とても信じられません。
だって今まさにあなたの話を聞いている僕がいるわけですからね」

安「もちろんそうですよね。信じろっていても無理な話だと思います。
あなたは、数十年の寿命しかない肉体を持った宇宙から切り離された
ちっぽけな存在を自分だと思っていますから」

斉「誰もがそう思っているはずですよ」

安「そう誰もがそう思っています。

自我があるおかげで、六十八億人が同時に壮大な人間ドラマを楽しむことができるわけです」

斉「そう、私は六十八億の一、ちっぽけな一人の人間なんです」

安「その通りです。あなたは、六十八億分の一です。

小さなレストランさえ潰しかけているちっぽけなダメ人間です」

斉「・・・ダメ人間なんて、誰も言ってませんけど」

安「ダッハッハ・・・これは失礼、冗談ですよ。

あなたは、自分のことを小さな波のようなものだと思っています。それはそれでOKなんです。間違っているわけではないんですね。

でもよく考えてみてください。

波は、海で起こるひとつの“現象”ですよ。

波は、海そのものなんです。

一度も、海から離れたことがないし、波という“現象”がなくなっても、海であることには変わりありません。

あなたは“一部”であり、同時に“全体”であるということです。

脳は、“自分は六十八億分の一だ”としか認識できませんが本質的には、“あなたしか存在しない”んです。

あなたは、生まれてきたのでもなく、死ぬこともありません。

“生死”は、波である人間の認識にすぎないんですよ」

斉「この肉体は、波のような現象で、生まれてもいないし、死ぬこともない」

安「そうです。

もしあなたがその“真実”を知ったとしたらどうなるでしょうか？」

斉「正直わかりません。

でも、間違いなく人生は違ったものになるでしょうね。

**すべては、起こるべくして起こっていることであり
本当の僕は、それをただ体験し、感じている。**

もし、人生の目的が、“体験すること”であったなら
すべてがうまくいっているということになりますよね」

安「そう、完璧でしょ？まったく大笑いですよ、ダッハッハ！」

斉「やっぱり軽いですね」

安「**そう、ドーン！と軽くなっちゃうんですよ」**

斉「もう安達さんは迷ったり、悲しんだりしないんですよね」

安「いやいやとんでもない。大いに迷い、大いに悲しみます」

斉「えっ、そうなんですか？」

安「だって、“それ”しかないじゃないですか。

泣いたり、笑ったり、迷ったり、喜んだり・・・それが“人間”なんです。

せっかく“人間をやっている”んですから

この自分をとことん楽しんだらいいんですよ」

斉「“人間をやっている”・・・そういう感覚になるわけですね」

安「**そう、主体が変わるだけです」**

斉「主体が変わる？」

安「今、斉藤さんは、この肉体が主体だと思っているでしょ」

斉「そうです」

安「でも、“本当の自分”が誰だかわかっちゃうと

主体が、この肉体の自分ではなく、“本当の自分”にシフトするんです。

数十年の寿命しかなく、すべてから孤立している小さな小さな自分から

ドーンと“宇宙大の自分”に変わるんですよ」

斉「なんだかすごい話ですね。頭が爆発しそうです」

安「斉藤さんは、映画館に行ったことはありますよね」

斉「ええ、映画は好きで、月1、2回は行ってましたね」

安「なぜそんなにお好きなんですか？」

斉「さてなぜでしょうね。いろいろなストーリーを楽しめるからかな？

それに映画館に行くと、自分がその映画の中に入り込んだような

臨場感を味わえますからね」

安「そう、まさにその感覚ですよ。

この人生が映画だとわかっているからこそ、安心して楽しむことができるんです。

涙あり、笑いあり、喜びあり、苦しみあり・・・

なんでもありの、本当によくできたエンターテインメントですよ」

斉「人生はなんでもありのエンターテインメントか・・・

でもそうは思えないのは、この映画を真実だと思い込んでいるからですね」

安「そういうことです。

でも、もし“斉藤信也の人生”という映画を観ているのだとしたら？」

斉「もっともっと気楽に生きられそうですね。

でも、安達さんは、なぜそんなことを知っているんですか？」

安「体験したからですね」

斉「何を体験したのですか？」

安「**映画館の外に出る体験です。だからこれは映画だと気づいたんですね**」

斉「・・・もう少しわかりやすく教えてください」

安「では、ここまでの話をまとめてみますね。

この肉体は、“人間体験マシン”のようなものです。

人生に目的というものがあるとしたら、それは“体験する”こと。

それ以外は、何にもありません。

悲しむ、迷う、怒る、笑う、喜ぶ、恐れる、嘆く・・・

ひとつひとつがその“体験”です。

ですから、どんな人生であっても、すべてプログラム通りに完璧にうまくいっているわけです。

でも、どうしてもそうは思えない。

なぜなら、私たちは、数十年しか持たないこの肉体こそが自分なんだと思い込んで生きているからです。

だから、出来事ひとつひとつを“良い、悪い”とジャッジして

もっと人生を良くしよう！もっと幸せになろう！と

“今”を否定しながら生きていくわけです。

この世界には、“今”しかありませんから

死ぬまで、自分を否定する人生が続いていくんですね。

自分が誰だかわからない・・・

これが“苦しみ”の根源なんです。

誰だかわからないと不安ですよ。

自分は、価値がないのではないかと、出来損ないなのではないかと感じるわけです。

だからステイタスを外の世界に求めたり、他人から認められようとしたり・・・

孤独感や虚無感を満たしてくれる仕事やパートナーに執着したりするんですね」

斉「笑っちゃうほどその通りですね。

ずっと心の中に虚無感を抱えて生きてきました。

何とかそこから逃げよう逃げようとして、がんばってきたような気がします」

安「でも自分からは逃げることはできませんよね。

自分が誰だかわからない限り、孤独感や虚無感がなくなることはありません。

外の世界からどれだけ価値のあるものを手に入れてもね」

斉「はぁ・・・なんだか力が抜けてきました」

安「私がした体験とは、さっき斉藤さんは言っていた“**認識する以前の世界**”です。

ラベルのない世界は、ハイビジョンテレビなんて問題にならないほど美しく輝き音は世界を包み込むように臨場感に溢れていました。

そこには、“私”という個人はいませんでした。

見るもの、聞くもの、“すべてが自分だった”んです。

そして、絶対的な安心感、感じたことのないような至福感に包まれました。

しばらくして、我に返った時に浮かんできたこと。

それは、“**すべて逆だった**”ということです」

斉「すべて逆？」

安「そう、この世界は“**パラドックス**”になっているんです。

だから求めれば求めるほど、それは遠ざかっていくんですね」

斉「それは、なぜですか？」

安「絶対的な安心感、至福感、宇宙との一体感・・・

私たちがずっと求めていたものは、すべて最初から“ここ”にあったからです。

今ここにあるのですから、どこにもいなくてもいいし、何もしなくても

良かったんです。でもなぜか、私たちはそれを見つけることができなかった。

なぜなら、“本質の世界”に“認識の世界”を重ねて見ているからです。

“ダイヤモンド”にべったりと、赤いペンキが塗られているのですから

見つからないわけですね」

斉「もしかして、僕も今その世界を見ているわけですか？」

安「もちろんです。人間だけではなく、すべての生命がです。」

斉「ぜひ一度私も体験したいです。

でも“私”がない世界ですか・・・なんだか怖いですね」

安「それが正反対なんですね。

高層ビルから飛び降りるような恐怖を感じるかもしれませんが

そもそもビルなんてどこにもなかったんです。

恐怖を創りだしていたのは、すべて自我だったことがわかりますよ」

斉「すべて自我ですか・・・」

安「そうです。

恐怖感も、孤独感も、虚無感も、劣等感も、欠乏感も・・・

すべて自我から生まれています。

私たちは、そこから逃げて、自我を満たそうと外の世界に執着しますが

そうすればするほど、“本質の世界”から遠ざかっていくんですね」

斉「まったく逆をやっていたわけですね。でも、ここで気づけて良かったです。

なんだかとても気持ちが楽になってきました」

安「それは良かったですね。

ただ、残念ながら、それも一時的なものなんですね。

実体がないと言っても、自我のパワーは強烈です。

数日もしたら、すっかり自我の世界に引き戻されているはずですよ」

斉「やっぱり、体験するしかないってことか」

安「はい、そういうことです。

どんな人のどんな話を何度聞いても、“気休め”にしかありません。

なぜなら、ただ情報をインプットしているだけだからです。

古い家具の上に、新しい家具を置いても部屋は片付かないでしょ。
確かに新しい家具は魅力的で気分も良くなりますけど、
結局は、余計ごちゃごちゃしてくるだけなんですわね」

真実の鍵とは

斉「じゃあ、一体どうすれば体験できるのでしょうか？」

安「**体験は、するのではなく、“起こってくる”んです**」

斉「起こってくる？」

安「テレビと番組の話をしましたよね。

“する”というのは、番組の中の話です。

自我が何かを得ようと、がんばればがんばるほど
番組は、いつまでも騒がしくずっと流れ放しです」

斉「あ、そっか！わかりましたよ。テレビを消せばいいでしょ。

そうすれば自分が番組ではなく、テレビだったことがわかりますから」

安「やりますね～ その通りです。

探すから、見つからなかったんです。

**“自分探し” “幸せ探し” という番組が放映されている限り、
自分も、幸せも見つからない。**

このパラドックスに気づいたときは、感動して笑っちゃいましたよ。
ずっと探していたものは、最初から、ここにあったんですからね。

“求めるのを諦めて、何もしない”

それが、扉を開ける鍵だったんです」

斉「諦めて、何もしない・・・何もしないことをする？」

安「そうです。

禅では、“坐禅”をするでしょ。

坐禅は、何もしない行なんですね」

斉「そうですね。

自宅の近所に、禅寺がありまして、何度か坐禅会に参加したことがあります。

でも、雑念や妄想がひっきりなしに出てきて、大変でした。

静かになるところか、余計イライラもやもやしちゃって・・・」

安「そうでしょうね。

自我は、何かをすることに存在価値があると思いついていますからね。

常に何かを考え、何かを行動し、何かを生産することに慣れ切っているんですよ」

斉「でも、坐禅は“悟る”のためにするわけでしょ？」

安「いえいえ、そうではないですよ。

そもそも、“悟り”なんてものは、どこにもないんです」

斉「えっ、“悟りが無い”のに、どうやって悟るんです？」

安「迷った、悟りたい、悟った・・・なんて言っているのは、すべて自我です。

その自我が、実は実体がない“幻想”だった・・・という真実に出会うこと

それが悟りであり“見性”です」

斉「見性？」

安「**自己の“本質”を知ることです。**

見性すれば、自分は、番組ではなく、テレビだった、

波ではなく、海だったということが一瞬でわかります。

ですから、本来“悟った人”なんてどこにもいないんですね。

もしそんな人がいたとしたら、まだ“悟り”という幻想に執着する

自我をしっかりかついでいるわけです」

斉「本当に悟ったら、“悟り”も消えてしまうわけですね」

安「炎天下で街中を歩いていたら、どこか冷房が効いている場所を探しますよね」

斉「まあ、そうですね」

安「で、ようやく見つけて、その建物に入る。

ひゃあ～こりゃ涼しいわい！天国じゃ～となるわけです。

しばらくすると、もう冷房のことなんて、すっかり忘れているでしょ」

斉「そっか！

だから、“悟った”とか、“本当の自分”だとか言ってるのは
まだ、“**その外側にいる**”ってことなんですね」

安「はい、そういうことです」

斉「なるほど、深いな～

ところで、その見性というのは、一体いつ起こるんですか？」

安「それは、誰にもわかりません。

柿の実が、いつ落ちてくるかわかりませんから・・・

実は、熟したときに落ちてくる。

それと同じですね」

斉「う～ん・・・いつ起こるかわからないのか～

どうにかならないものでしょうかね～」

安「ダッハッハ

残念ながらこれだけはどうにもならないですね～

でも、“実が熟する時期”を早める方法はありますよ」

斉「なんだ、あるじゃないですか！早くそれを教えてくださいよ～」

人生の支配者“超自我”との別れ

安「あわてない、あわてない(笑)

斉藤さんは、これまでの人生で“**違和感**”を感じたことは
ありませんでしたか？」

斉「あるどころか、もう、ありありですよ。

とにかく窮屈で仕方がないんです。

こうしたいってことがあるのに、なかなかできないし

やっちゃいけないってことを、ついやってしまいます。

とにかく自分がコントロールできないことがすごいストレスで・・・」

安「はいはい、わかりますよ。

私も40年間ずっと同じような違和感とストレスがありました。

私のパニック障害の原因は、それでしたから・・・

原因は、“超自我”なんですね」

斉「超自我？自我じゃないんですか」

安「実は、自我を支配している存在がいるんです。

それが“超自我”なんですね。

彼の仕事は、“善悪の観念”で、すべてをジャッジすることです」

斉「まるで裁判官ですね」

安「そうそう、“**過激な裁判官**”って感じですね。

相手はもちろん、自分まで裁きますからね。

問答無用、斬って、斬って、斬りまくるわけです」

斉「ひゃあ～ 聞いているだけで恐ろしい」

安「でしょ。

人生の問題事の大半が、この“超自我”が原因なんです。

禅には“**無縄自縛**”という言葉があります。

これは文字通り、無い縄で自分を縛るということなんですね」

斉「無い繩・・・それが“善悪の観念”？」

安「はい、その通りです」

斉「でも、もし“善悪の観念”がなくなってしまうら
とんでもないことになりませんか？」

安「とんでもないとは？」

斉「観念とはいえ、“善悪”がないと、この社会が大混乱するような気がするんですよ」

安「ダッハッハ、もうとっくにしていますよね。

実は、逆なんです。

68億人には、68億通りの“善悪”が、
200国には、200通りの“善悪”があります。

だから些細な夫婦ケンカから、国と国の戦争まで、
あっちこっちで、ドンパチやってるんですね。

もうすでに大混乱の真っ只中にいるんですよ」

斉「はぁぁ・・・“善悪”が争いの原因だったなんて驚きました」

安「心の中で起こっている争いが“ストレス”を引き起こして
その“ストレス”が原因となって、いろいろ面倒なことを起こしてくれるわけです」

斉「まさに負の連鎖ですね・・・その根源が“善悪の観念”か」

安「そうです。

そもそも“善悪の観念”を持っているということは

“**ルールを守らない自分**”がいるってことですよ。

その自分を“超自我”が問答無用で裁いているんですから

自分の半分を完全に否定しているわけです。

そんな人生がうまくいくと思いますか？」

斉「実際にうまく行ってません。毎日ストレスだらけですからね」

安「でしたらまずは、**観念浄化ワークで、“善悪の観念”を手放してみてください。**
やればやるほど、どんどん心が軽くなってくるはずですよ」

斉「わかりました。早速やってみたいと思います。
でも、観念浄化をやって、“本当の自分”に出会うことができるのでしょうか？」

安「テレビと番組の話を思い出してみてください。
今の斉藤さんは、24時間テレビなんですね。
あれをやれ！これはやるな！と心が静まることのないはずですよ」

斉「その通りです」

安「この頭の中のうるさい奴が“超自我”なんです。
“善悪の観念”がなくなると、彼の仕事はもうありません。
捨てれば捨てるほど、心が静かに穏やかになってくるんですね。

いままでストレスを感じていたことも、川の流れのように
さらさらと流れていくようになります。
とにかく人生がシンプルに、楽になっていくんですね。

そして、いつも過去や未来に向けていた意識が、
少しずつ“今”に照準が合ってくるようになりますよ」

今この瞬間の世界 ～最後の旅へ～

斉「“今”ですか」

安「観念というのは、“過去”なんですね。
ほとんどの人は、無意識に“過去”を基準に生きています。
本人は、今を生きていると思っていますけど、実は、そうではないんですね」

斉「それはまったく気づきませんでした」

安「**“今この瞬間”には、まったく何もありません。**

言葉も概念も観念も、すべて過去のデータなんです。
この“私”という自我も、過去の記憶の集まりですから、
当然、“私”も存在しません」

斉「僕がいない？」

安「そうです。今には、**純粹な“体験”しかないんです。**
“私が体験している”というのは、認識の世界の話です。
本質的には、“体験”だけがそこにあります」

斉「・・・」

安「**見性とは、私がない“今この瞬間”・・・**
言い換えると“本質の世界”を体験することなんです」

斉「・・・」

安「考えちゃダメですよ（笑）
私が存在しない世界を、私が考えても、絶対にわからないんです。

どこかで聞いたことがある、とか
私は、知っているよ・・・なんてことを耳にしますけど
それは言葉の通り、“聞いた、知っている”だけなんですね。

“絵に描いた餅は、食べられない”と同じで
言葉や概念や理屈がいくらわかったところで、何にも変わりません。
結局、**自我の“知識欲”**を満たしているだけなんですね。

“わかった”は、認識の世界の話です。
“本質の世界”には、言葉も、概念も、理屈もありませんので
そもそも、わかりようがないんです」

齊「そっか、だから講演会やセミナーに行ったり、何百冊という本を読んだりしても何も変わらなかったんですね。結局、体験するしかないのか・・・」

安「はい、その通りです。

どれだけ頑固な自我も、「体験」だけには敵わないんです。

UFOなんて、絶対にいない！！と思っけていても
実際に目の前に現れて、UFOの中に連れていかれて
宇宙人にお茶でも出されたら、もうどうしようもないでしょ」

齊「確かに（笑）」

安「ほら、パソコンで、ファイルを保存するときに

“**上書きしますか**”という選択がありますよね。

あれと同じですよ。“**体験する**”と、同時に古い概念が消えちゃうんですね。
だから、実際に変わってしまうというわけです」

齊「なるほど、そういう仕組みなんですね。

理屈や概念の理解は、ファイルを“**新規保存**”しているだけなのか・・・」

安「そういうことですね。

浄化ワークで、過去の基準である“**善悪の観念**”を手放していくと

人生を支配していた“超自我”が消え去り

思考の雲の切れ間から、カラッとした青空が見えてきます。

“**本当の自分**”は、雲ではなく、無限に広がる空だったことを、
体験を通して、思い出してくるわけです。

そこまで来ると、もう実は熟しかけています。

いつ“**見性**”が起こってもおかしくないんですね。

斉藤さんは、坐禅の経験があったんですね。

**坐禅や瞑想と、観念浄化ワークはどちらも“体験型ツール”ですので
相性がバッチリです。**

ぜひ、この組み合わせをライフワークにしてみてください。

トンネルを両側から掘っていくように、何倍もの速度で旅が進んでいくはずですよ」

斉「はい、わかりました。

今日は、ものすごい話を聞いてしまったような気がします。
最初にお話しましたが、成功法則や願望実現や心理学など
本当にいろいろなことをやってきたんです。
でも、こんな話は、一度も聞いたこともありませんでした。

まさか、ちっぽけなこの僕が、“宇宙の創造主”だなんて・・・

もし、それが真実だとしたら、本当に**“生まれ変わる”**ことができそうです。
そうなったら、もう何も探する必要がないですね」

安「そう、“最後の旅”ですね」

斉「“最後の旅”？」

安「**“本当の自分”は誰か？**

その真実がわかれば、もう自分探しも、幸せ探しもおしまいです。
人生のすべてに**“決着”**が着いちゃうんですね。
どっしり安心して、人生という**“体験”**を楽しむことができます。

もう世界中の人が、“真実”に気づき始めています。

なんだかおかしい・・・これは**“本当の自分”**じゃないってね。

斉藤さんや私が感じていた**“違和感”**を抑え切れなくなった人が
続々と増えてきているわけです。

“禅”も世界的なブームになっていますし
いよいよ**“新しい時代”**に突入したなって、感じています。

塾のインターネット講座にも、現在250人以上の方がおられますが
会社員や自営業の人、主婦、学生とみなさん普通の人達なんですよ」

斉「へえ～そんなにいるんですか。

インターネット講座のメリットってどんなものがあるんですか？」

安「教材など詳しい内容は、人生上昇塾のホームページで
ご案内しているので、ぜひ見てみてくださいね。

私は、ずっと一人でこの旅をやってきたんですね。
まったく前も見えず・・・だからありとあらゆる落とし穴にはまってきました。
自我の抵抗も強烈でしたし、何度も途中で挫折しかけたんです。

そんなとき、喉から手が出るほど欲しかったものが二つありました。

ひとつは、この“**旅をガイドしてくれる人**”。
もうひとつは、“**気づきをシェアできる仲間**”です。
このふたつが揃っていれば、どんなに楽だったかと思います。

“一人”で旅を続けていくと、時間やエネルギーを相当に消費するので、
途中で挫折する可能性が結構高いんですね。

このインターネット講座のテイクオフコースは、私が実際に旅をしてきて、
もっと楽に、少しでも早く・・・をコンセプトにアイデアを凝縮したものです」

斉「ということは、講座を受講すれば、見性できる？」

安「ダッハッハ・・・それは私にはまったくわからないんです。
その人が“準備”できているかどうかですよ」

斉「準備？」

安「正邪、損得、優劣、美醜などの“**観念世界**”に執着している人や
願望実現や成功法則など、まだ“**自我を満足させるゲーム**”を遊び足りない人は
ちょっと難しいですね。

こんな人生はもう十分だ、よし生まれ変わってやるぞ！

と心に決めている人は、とにかく進むのが早いです。

すでに“ツアーガイド”として活動している受講生が何人もいますしね。

“新しいゲーム”をはじめするためには、まず古いゲームをやめなければならない。
その決心が出来ているかどうかです。

私たちガイドの仕事は、“扉の前”まで連れていくだけです。

実際に、扉を開けるのは、その人ですから」

斉「なるほどそういうことですね。

僕も“心の準備”ができたら、ぜひ一緒に旅をさせていただきます。

今日は、長い時間ありがとうございました」

安「こちらこそ、ご縁をありがとう。どうぞ良い旅を」

探すことをあきらめたとき・・・
自分自身が光り輝く“ダイヤモンド”だったことを
思い出すはずです。

最後まで、お付き合いいただきましてありがとうございました！
感謝！<(_ _)>

人生上昇塾・無料教材第3弾
最後の旅～The last travel～

著者

人生上昇塾 塾生代表

安達 正純

MASAZUMI ADACHI



人生上昇塾 ～本当の自分へ還る旅～

ホームページ <http://www.e-jinsei.net/>

ブログ <http://jinsei.ti-da.net/>

メルマガ <http://www.mag2.com/m/0000187992.html>

mixi (栗A太) http://mixi.jp/show_profile.pl?id=8968922

[企画・発行]

株式会社ワークイットプロデュース

この「電子ブック」についてのお問い合わせ・ご感想は

info@e-jinsei.net